高等学校公民科において
社会的事象を多面的に捉える力の育成

－葛藤のある価値判断場面づくりと４象限マトリックスの活用を通して－

学籍番号　179982
氏　　名　山本　真輝
大学院主指導教員　中西　修一

1.　研究の背景

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（中央教育審議会　2017）の中で、「資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分」であることが指摘されている。

また、「高等学校学習指導要領解説公民編」（2018）では、「生徒が多面的・多角的に考察し、事実を客観的に捉え、公正に判断することを妨げることのないよう留意するとともに、客観的かつ公正な資料に基づいて指導するよう留意することが必要である」と記載されている。

このことから、生徒１人ひとりが、「正解のない問い」にも自分なりの最適解を導き出す力、それに基づいて行動する力を育成していくことが必要であると考える。そのためには、まず前提として社会的事象を多面的に捉えることが必要であり、多面的に捉える力が身についてこそ公正な判断等が可能になると考え、上記の研究主題を設定した。

2.　研究の目的

基本学校実習では、公正に判断する力を育成するためには、常識を疑い、固定観念や既成概念にとらわれず、複数の視点から「多様な仮説」を立てることのできる社会を読み解く目、すなわち、複眼力を育む必要がある。このような考えのもとで複眼力の育成を図った。

本稿者は、複眼力を育むためには、社会的事象を見方・考え方を働かせ、多面的に考察し、既有の見方・考え方を成長させる。その結果、複眼的に社会を見る目が養われ、公正な判断ができるようになると考えた。しかし、基本学校実習で生徒の実態や本稿者の授業力を踏まえると、上記の一連の過程すべてを実践研究の期間内で行うことは難しいと感じた。

そこで、発展課題実習からは、複眼力という言葉を改め、複眼力の土台となる「社会的事象を多面的に考えられる力」の育成に特化した。

発展課題実習Ⅰでは、価値判断場面（二者択一）の設定と４象限マトリックスを活用して、社会的な見方・考え方の成長や公正な判断をする土台となる力、すなわち、「社会的事象を多面的に考える力」の育成をめざした。

発展課題実習Ⅱでは、葛藤のある価値判断場面（二者択一）の設定と４象限マトリックスを活用して、授業の中で資料及び実際の事例を検証する活動を行い、他の生徒と価値観を共有する中で多面的な視点から課題を追究する中で、社会的事象を多面的に捉える力の育成をめざした。

3.　基本学校実習の成果と課題

成果は、資料の読み取りなどを通して、授業の中で得た知識を活用して生徒が判断・提案する場を設定するなど学習課題の工夫により、複数の生徒が、積極的発言するなど社会的事象に関わろうとする姿が見られた。実際に、授業の最後の振り返りではクラスの生徒の 3 分の２以上の生徒が一言ながら考えや意見を記述でき、社会的事象を一面的に捉えている様子は見て取れた。

課題は、授業は全体的に教師から生徒に発問をして考えさせるなど、口頭で教師からみた見方・考え方を提示するに留まることが多くなった。また、自分とは違う考え方など多くの考えを見聞きし、多様な価値観に触れさせるために、ペアワークやグループワークといった対話的な活動を設定していた。しかし、本稿者の授業力不足もあり、生徒同士のペアワークやグループワークといった自分とは違う考えなど多くの異なる考えを見聞する時間を十分に設定できなかった。

このため、多くの生徒が社会的事象を多面的に捉えることができず、複眼力の育成という点では不十分であった。生徒の思考を発展させ、多様な追究を引き出し、葛藤や対立を生み出すためには、内容豊かな教材・資料の準備や多様な価値観に触れられる指導方法の工夫が必要であった。

4.　発展課題実習の成果と課題

成果は、学級全体で多様な価値観を共有する時間を設定し、具体的な行動案や解決策を多面的に捉えさせる活動を行ったことで新たな視点を得られ、最初は立場 A を選択していた生徒が授業の最後には立場 B に変わるあるいはその逆に立場 B から立場 A に変わる生徒が数名見られたことから自分の意見の再構築することにつなげることができた。その結果、最終の価値判断で多面的な視点に基づいて自らの考えを深化させた価値判断ができた生徒が少なからずいた。

このことから、社会的事象を多面的・多角的に捉える力を育成するためには、価値判断場面を設け、生徒に多様な価値観にふれさせることが有効であることが分かった。

課題は、資料の特徴をつかみきれなかったり、価値判断の場面で資料から読み取った内容を活用できなかったりした生徒もいたことから、資料活用に関する手立てを工夫する必要性を感じた。また、授業の最後に双方の立場のメリット・デメリットを 4 象限マトリックスに整理をさせたが、整理できない生徒がいた。その要因は、様々な視点を生徒に示したうえで、授業の最後にマトリックスを整理させたことが一因になったと考えた。例えば、食料自給率でいえば、授業の最後にマトリックスに整理させるよりもスモールステップで輸入に頼ることについてのメリット・デメリットの提示が終了した時点で一度整理させるなど、その都度整理を行い、いつでも確認ができる状態を作るなどの工夫が必要であった。

5.　今後の展望

生徒の経験等に寄り添った資料選択や教材開発の工夫は、より生徒の実生活と結び付けて思考を促すことにもつながったため、生徒の多面的な思考を促すためにも教材選択の工夫を行うことが重要であると感じた。また、生徒の記述からは、価値判断の活動を通して社会的事象を多面的に捉えている成果をうかがえるものがあった。このことから価値判断をはじめとする「思考力・判断力・表現力」の育成を図る授業をこれからも実践することの必要性を感じた。

以上を踏まえ、今後も、生徒たちが、公民科で扱う社会的事象と生徒自身の経験等を結び付け、切実性をもって価値判断できる生徒の姿を目標に実践研究を重ねたい。そして、資料等を多面的に考察させることを重視した授業を行いながら、自らの考えを多様な価値観を踏まえ、表出することができる生徒を育てていきたい。